日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第115号　2007年3月

「ゆっくり学ぶシニア英会話」にみる「老人力」

安　藤　富　雄

1. はじめに

「老人力」という言葉が一般化しているかどうかは知らないが，このテーマで何か書くように依頼を受けたことは，筆者自身が老人の部類に入れられていることを客観的に知る機会となった．「老人力」とは何か？この聞きなれない（少なくとも私には）用語の意味を考える暇もなく，この依頼を即座に引き受けたのは，自分が老人に分類されたことへの戸惑いとショックの照れ隠しであったのかもしれない．

考えてみれば，古希を迎えた今，面と向かって老人呼ばわりされても不思議ではない．ただし自分自身としては，体力の衰えは別として，老人を意識して行動するとか，老人だからといって思考方法や生活習慣を変えることもなかったのは事実である．健康の面においても，昨年夏に心臓の手術を受けて1か月ほど入院生活を送った現在でも，自分を老人と意識しようとすることはない．それが「年寄りの冷や水」，「やせ我慢」と言われるのかもしれないが．

しかし改めて考えてみると「老人力」とは何だろうかと思う．かつて言われた「ウーマンパワー」，「住民パワー」の延長線上で考えるとおおよその見当はつく．女性にしろ，住民（個々ばらばらになっている一般市民）にしろ，本来は何も力がない弱者であると考えられていた．老人も同じである．しかし女性や住民にも，権利に目覚めて要求を勝ち取るために集団で行動する力(団結力）があることを示した「〇〇パワー」と言われるようになった．したがって「老人パワー」と言えば，「高齢者全国大会」や「年金者組合」，趣味や娯楽以外に「老人会」が時折行なう要求署名活動などが連想される．しかし「老人力」と言う場合は少し違ったニュアンスがあるようだ．「女性力」「住民力」とは言わないからだ．

2.「老人力」とは何か？

前述したように，自分で老人としての自覚がない以上，これまでこの言葉に出会っていても気にも留めることはなかった．ネットで検索してみると，十指にあまる「老人本」が出ている．そ

の中で赤瀬川原平の『老人力』は書店の書架で見かけたことはある．よく読まれているらしいが，いったいどんな人が読むのだろうか？　少なくとも私たちの「老人仲間」では，話題になったことはない．類書のタイトルを見ると，だいたいこの種の本は，これまでボケ老人とか言われて役立たずと見られていた高齢者が，どっこい，そうではないぞ，こんな能力があるぞ，こんな生きがいを見つけているぞ，という自己主張か，あるいは定年退職後に時間を持て余している老人に生き方を教える how-to ものが主流のようだ．実際に本を手に取って見もしないでこんなことを言っては，著者には失礼かもしれない．しかし自分で自分を老人と決めつけ，その生き方や生き甲斐を書物に求める気にはなれないのは，私の一人よがりだろうか？　長い年月を生きてきて，良きにつけ悪しきにつけさまざまな経験を積んできた高齢者は，それぞれに生きるうえでの知恵を身につけ，哲学があるはずである．

「老人力」とう言葉が，いつどのような経緯で生まれたのかは知らないが，教育学でよく使われるようになった「人間力」からの類推とも考えられる．しかしこの「人間力」という何となく漠然とした用語にも，格別な注意を払ってこなかったので，改めて「人間力」とは？と問われると困ってしまう．人を引き付ける人間的な魅力ともとれるが，何か人を圧倒するような力（押し）も連想してしまう．ネットで調べてみると「人間力パワーアップ講座」なるものもいくつか見受けられる．この力を身につけると，他人より優位に立つことができるというのだろうか？そうなると「リーダーシップ」のようなものかもしれない．ある HP では「対社会的能力のことを言う」と定義づけ，「企業の経営者や管理者，社会の指導的立場にある人」（中西寛）にこの力を磨くことを薦めている．その例として，「信じる力」「耐える力」「許す力」などを挙げていることから考えると，これは多分に精神的なもので，知識とか教養とは違う概念であることがわかる．事実「学校教育においては，倫理教育等によりある程度はこうした人間力に関する教育がなされているようであるが充分とは言えない」と指摘していることから，学校における知育を補うことに「人間力」の有用性を認めているようだ．ということは，一般に言われる「学力」だけでは達成できない「力」，あるいは「学力」と相俟って社会的成功を保障するより高次の能力を「人間力」と呼んでいるのかもしれない．そうなると「老人力」はもちろんこのような「人間力」とは異なる次元の話である．

3.「シニア英会話クラス」で学ぶ人たち

話は一転するが，大学が開いている生涯学習センターの講座「ゆっくり学ぶシニア英会話」を 2000 年から担当して 7 年になる．私が半田キャンパスで学部の学生に英語を教えているということだけで依頼されたのだが，高校生や大学生以外の人たちに教えるのははじめての経験である．当初は何をどのように教えたらいいものやら皆目見当もつかず，気軽に引き受けたことを後悔した．受講生は半田市内とその周辺に住む 55 歳以上のシニアの方々で，高校・大学で英語を習ってからはほとんど英語の勉強をしたことがないが，退職して，あるいは子育てがすんで手が空い

たから英語でもやってみようという人たちである．しかしその方々が，実際にどの程度の英語の力があり，どんなことを身につけたいのか，「ゆっくり学ぶ」とはどのような学習方法を想定しているのかわからない．「英会話」というからには，英語を使って口頭でコミュニケーションがとれるようになりたいという願望は理解できるが，どのレベルの会話ができることを望んでおられるのか，勝手に想像して手探で始めなければならなかった．

まず講座の内容であるが，「会話」といっても私はネイティブ・スピーカーではないから，90分の授業を私が受講生と英語だけでずっと話し合うというのは無理なことだ．他にネイティブ・スピーカーが担当している講座はいくつかあるのだから，ここは日本人が日本人に教えるという特性を生かして，授業は日本語で進め，受講生に十分理解して納得していただけるように進めることにした．したがって，市販している日常生活で使う実用的な英会話のテキストを使った会話練習から始めて，英語を読むことも会話の基礎となると考えて，併せてストーリー性のある英文を毎回少しずつ読んでいくことした．

以来7年間この基本線は変えていないが，その間にはいろいろなことを試行錯誤してきた．たとえば，「ネイティブの話すことが聞き取れない」という悩みに応えようとして，2年目には録音テープによるリスニング練習を毎回短時間行なってみた．しかし，状況も分からない場面で，だれがだれに話してかけているのかも分からない会話をテープで聞いても，なかなか理解できないのは当然のことであった．聴講生の方々は，通常の学生に比べてきわめて真面目で，どんなに難しいことを扱っても授業には付いてこられるが，このリスニングだけは居眠りが目についた．いくらやさしい会話でも，スピーカーから聞えてくる音声の内容がわからなければ，まったく学習にはならないことがわかって，翌年から止めた．

2000年1月「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」が発表され，将来英語を第二公用語にすることが話題となった．文部科学省においても英語を人間力戦略の一環とする行動計画を立て，中・高・大学のみならず小学校からも英語を導入することや，企業における英語力の伸張を図ることが宣言された．ところがこの「戦略構想」の中にはいわゆる「シニア」は想定されていない．あるとき聴講生にアンケートで，英語検定やTOEICなどの技能検定を目標にしたいかどうか，そのための練習問題をしたいかどうか尋ねてみた．答えはゼロであった．

そんなことを繰り返しながらわかってきたことは，この人たちが目指しているのは，国が求めているように，だれもが海外へ出て行って自由に交流ができるような高度の英語力ではなく，ましてや産業界が求めている国際化に対応できる語学力獲得を意識されているのではないことであった．そうではなくて，もっと個人的な動機から，たとえば海外旅行で英語を使ってみたい，旅行先で現地の人と話してみたいという素朴な要求からこのクラスへ足を運ぶことを思い立ったというのが一般的な動機である．さらに言えば，子どもが外国人と結婚して国外に住んでいるからとか，毎年外国の方をホームステイに招いているからという，家庭生活の多様性から生じる必要性が意外に多いことである．なかにはアメリカに嫁いでいる娘の出産の手伝いにこの秋渡米するのでそれに間に合うようにという緊急な要請もあった．

4．英語を学ぶ楽しさ

ところで，ここ数年この「ゆっくり学ぶシニア英会話」の授業開きでは，受講生に「クラスの特徴」として次の 3 点を確認している．

「このクラスでは，①さまざまな表現を勉強しますが，それをおぼえなくてはいけないという義務はありません．②宿題は出しませんが，自発的な勉強は自由です．③期末テストは行いません．したがって評価もつけません．できるだけ授業を楽しんでください」

「義務なし」「宿題なし」「テストなし」で，果たして授業の効果はあるのか？　今の小・中・高校でなら，とうぜんこんな疑問が起きてくる．しかしこれは教える側の手抜きから考えついたことではない．「シニア英会話」の授業での失敗から学んで得た結論でもある．

前述のように，この講座は高校・大学で教えた経験だけからスタートした．しかし教える対象を高校生や大学生から，シニアの方々に置きかえただけではうまくいくはずがなかった．言葉を学ぶことは，人間として生きる可能性を広げる楽しい営みであるはずだ．ところが現実には高校・大学での英語教育は，その楽しみを疎外する傾向に流されがちである．英語で外国人と意志が通じあえた喜び，原語で外国文学に触れる楽しさ，英語で書いたメールに返信が来たときのスリリングな気持ちなど，英語を学ぶことで得られる喜びは測りしれない．しかし学校教育というシステムでは，どうしても授業の効果を数量的に表すことを余儀なくされる．テストで何点取ったか，英語検定で何級が受かったか，TOEIC の得点は？　などが英語教育の目的となってしまう．近頃某大臣の「女性は産む機械」発言が話題になったが，知らずしらずの内に生徒を「英語の点数を産む機械」と見なしてしまわないか．その結果が〇〇大学に合格，××会社に就職として結実し，それが彼らの望む進路や人生の目標につながれば，それはそれで英語教育のメリットと言えるのだろうが．

「シニア英会話」の授業も，はじめは私が行なってきた高校・大学の英語の授業を，少しレベルを落として実施したにすぎなかった．しかしこのような英語の授業が，このクラスをわざわざ選んで受講されているシニアの方々にとって，どんな意味があるだろうか？　この人たちが自ら進んで英語を勉強しようと思い立たれた気持ちは，文部科学省が日本語と並んで英語を公用語にしたいと狙っている戦略とは，いささか違うのではないかということに気がついた．

何が違うのだろうか？　ちなみに今年度（2006 年度）の受講生の声を聞いてみよう．

> 「大学を卒業してから今までずーと仕事でした．家事，子育てととても忙しい毎日を過ごしていた．4 月から自分のための時間を持ちたいと思い福祉大のパンフレットを見てやって見ようと考えた．なぜ英語なのかと言うと，娘がアメリカに留学していたとき，外国の人が何を言っているか分からなく自分が惨めな思いをしたからです．この講座に出席し，何年も続けてみえる人たちに会い，私もコツコツと勉強しようと思っています．またこの英会話に通うようになり，木曜日が楽しくなり，人との出会いを嬉しく感じている．これからもチャ

ンスがあれば，一人で short stay をして外国の文化に触れてみたい」

「①（英語の勉強を思い立った理由）定年退職後のボケ防止対策，錆びつつある脳に刺激を与えるため，5 年後の愛宕万博に活用したいため，海外旅行をより以上に楽しくしたいため．②（出席してよかったこと）居心地が良好な教室，英会話が出来るようになりたい気持ちが持続している．個々のレベルに合わせて向き合ってくださる．③（これから目指すこと）継続は力なり，ボケるまで英語に興味を持続したい．早く相手と会話（言葉）のキャッチボールが出来るように進歩したい」

「英語は好きだったのですが，家の都合で進学できませんでした．今私の楽しみの時間を持てるようになって，友人が同じように日福で学んでいることを知り，何らかの形で学びたいと思い始めました．良かったことは 1 学期に比べ 2 学期は覚えが良くなってきたことです．年をとっても鍛えれば脳力も付くと実感できました．今のレベルでこれから目指すことは大それた感じですが，中学 3 年レベルまでいって，外国の方と少しでも会話ができればと思っています」

5．英語で輝く人生経験

言葉を学ぶ楽しさは，言葉それ自体というよりはおぼえた言葉を使ってコミュニケーションができることにあることはすでに述べた．それは上記の 3 人の受講生の方の声からもうかがえる．さらに，覚えた言葉を使って自分の考えや感情を表現できることが学習の発展と継続には欠かせない．それには発した言葉を受け止めたり，表現したことを理解し共鳴してくれる相手がいなくてはならない．だから英語の学習にはクラスという集団が必要になってくる．その点がラジオ講座や通信教育，あるいは新聞広告で宣伝しているテープを聞きながら眠っているうちにすらすら話せるようになるという学習方法とは違う．

したがって，「シニア英会話」で心がけていることは，ペアによる対話の場と自己表現の機会をなるべく多く作ることである．したがって教室の机の配列も，いろいろ試してきた結果今では教壇を出口にした「コの字型」にして，隣同士でペアを作ると同時にできるだけみんなで顔を向き合わせられるようにした．授業の方法も 2006 年度（受講生登録人数 19 名）では，毎時間の初めに Opening Talk として，ある場面を設定してしばらくはペアで自由に会話を楽しんでもらった．たとえば，

Opening Talk　　（下線部は適当に置きかえて練習する）

A: Where is the taxi stand?（タクシー乗り場はどこですか）
B: <u>In front of the station.</u>（駅の前です）
A: Thank you.
B: You're welcome.

A: Could you take me to the Yakachi River?
D: Sure. Please get in.
A: How long will it take to get there?
D: Ten minutes.
A: I hear cluster-amaryllis are in full bloom now.（運転手さんと何か話をする）
彼岸花　満開

この場合は，A が半田市を訪れた外国人，B は半田市の住民，D はタクシーの運転手であるが，ペア練習だから，B と D は一人で受け持つ．上の例は半田市岩滑にある彼岸花で有名な矢勝川を訪れる設定であるが，その他の場所を想定した対話を作り出す．客の外国人はさらにさまざまなことをタクシーの運転手に尋ねて，それに答えるという趣向である．出来上がったところで，各ペアがどんな会話ができたか，みんなに披露して笑いこけるのが楽しい時間である．

自己表現の方法として，毎年行なっているのが英語の俳句作りである．日本語の俳句も作ったことがない方がたがほとんどであるが，次のような簡単な約束ごとだけでとにかく作っていただいて，私の方で少し手を入れて授業で発表する．

(英語で俳句を作ってみましょう)

英語の俳句の決まりはとくにありませんが，このクラスではだいたい次のような基準で，自分が見たもの（こと），体験したこと，感じたことなどを英語で書いてみてください．文法にあまりとらわれず，単語を並べる感じで書けばいいのです．

⑴ 3 行に分けて書く．各行の長さは自由ですがなるべく簡潔に．
⑵ 述語動詞は，1 つまたは 2 つまで，現在形か現在進行形（be ～ing)で使う．
⑶ 季節を表す言葉を入れる．
⑷ 各行の初めは大文字で始める．ピリオドは付けなくてもよい．
⑸ なるべく「5-7-5」になるような日本語に訳した俳句も書く．

2006 年度の作品例を紹介してみよう．

In the Senior English class We can talk whatever we think Early summer sky --- Nobuko 教室で　本音湧き出る　初夏の空	Cloudy in the rainy season Two snails creep Look like so happy ---- Junko 梅雨曇り　でんでん虫が　楽しげに
My grandson returned to his home Only a cast-off shell of a cicada Has been left ---- Fujio 孫帰り　せみの抜け殻　ただ残る	Half of a century has passed I make a tour of Nara and Kyoto Remembering the school excursion ----Katsuhiro 半世紀　奈良京都行く　秋の修学旅行（たび）

ある受講生からは夏休みの家族旅行の様子を英文で書いた My Travel Diary が，写真を付けてメールで送られてきた．それを授業でみなさんに読んでいただくなど，自発的な自己表現が授

業に活気を与え，お互いに学習への意欲を啓発してきた．今年度初めての試みとして受講生の方々が持っている宝物（My Treasure）を，実物か写真を持ってきて英語で紹介してもらった．高校時代の野球チームで使った思い出のボール，父の形見の尺八，昇進を祝って父から贈られた金時計など，その人の人生の一端をクラスメイトに語ることは，英会話の学習を越えた心の交流ができたのではないかと思う．ある受講生は，My Treasure ならぬ My Mother's Treasure を，次のように紹介された．

> My mother's treasure is a pair of shoes that I used to wear when I was about two years old in Manchuria. Now my mother is 85 years old.
>
> Even now she still keep them somewhere in my house. The shoes are packed with the joy and sorrow my mother felt when she lived in Manchuria. I have become old enough to understand her feelings.

6.「老人力」から「真の人間力」へ

最初にもふれたが，最近「〇〇力」が流行語のように使われるようになった．「理解力」とか「包容力」などのように一般的な名詞に「力（りょく)」を付けた語句は何の抵抗もなく使われているが，「神通力」とか「念力」，仏教で使う「願力」「信力」などのように「力（りき)」の意味で，今までは組み合わせていなかった名詞につけて，何か不思議な「魔力」を持つようなニュアンスで用いられる熟語が表れてきた．「老人力」や「人間力」もその中に入ると思われるが，「人間力」という言葉に私がなんとなくうさんくささを感じる．長年教師という仕事をしてきてが，今その仕事を終わろうとしているときになって，いかに無頓着に「学力」という言葉を使ってきたかということへの反省からくるのかもしれない．

私が高校の教師になりたての頃であった．毎時間英単語の小テストを行なっていたが，そのうちにマンネリ化して生徒はいっこうに覚えてこなくなった．そこでとった方法は，毎回のテストの点数を生徒の氏名表に書いて教室の掲示板に貼り出すことであった．教えることに自信がもてない新米教師が，生徒の間に競争心を煽るためによく用いる手である．こんなことは当の本人は忘れてしまっていたが，十数年後の同窓会の席である元女子生徒がそのことを持ち出して，「点数を貼り出されることくらい嫌なことはなかった」と語ったとき，周囲から共感の声が沸き起こった．そのときの恥ずかしさは今もって忘れられない．そしてその後数十年にわたる教師生活のなかでも，「学力」の名のもとにこのような「罪」をどれだけ犯してきたことかと反省させられる．もちろん生徒・学生の成績評価に当っては極力客観的な基準にしたがって「学力」を判定し，公平に扱ってきたつもりだ．しかし所詮は数字では測れない「学力」を数量化することで，人間をランク付け区分してきたことには間違いない．

そして今，新自由主義の名のもとで人と人を競わせて，その結果によって「勝ち組」「負け組」に分けていくことが教育の中にも持ち込まれてきた．競争と効率を追い求めるのが「改革」であ

るかのように思わせる社会にあって，「〇〇力」が流行ることは当然のようにも思われる．岩川直樹氏（埼玉大学）は「現代における『力』概念の変成のダイナミズム」の傾向の一つとして次の点を挙げている．

「あらゆる人間的ないとなみ，あらゆる人間的なゆたかさが，個体還元的・スキル主義的・数量評価的な『〇〇力』に転化されていく」(『希望をつぐむ学力』明石書店)

山本由美氏（浦和短期大学）によれば，改悪された教育基本法第 17 条にある「教育振興基本計画」の先取りといえる「足立区教育基本計画」(2006 年 6 月）には，「人間力の育成につながる学力向上」が目標に掲げられているという．そして「“人間力”とは文科学省で数年前から研究プロジェクトに掲げられたタームである」と述べている．(「東京都に見る新自由主義的『教育改革』の実態」『前衛』2007 年 2 月号)

前記の岩川氏は，「人間力」の意味の転化について次のように指摘している．

> 「『人間』ということばは，かつては『人間味』とか『人間らしさ』とか『人間くささ』といった．それが，いまでは『人間力』と呼ばれるようになることのうちに，現代の歴史的局面がある．……路上でたたき売りをするフーテンの寅さんの『人間味』が，どこかのスキルアップ講座で訓練される『人間力』に転化する」(同上)

これまで見てきたように「シニア英会話」に励んでおられる年配者の方々の生き方は，「老人力」・「人間力」という範疇を越えて人間としての本来の姿を思い出させてくれるものがある．これから日本の人口の大半を占めることになるシニアの方がたが，狭い意味での「老人力」から解き放たれて，これまでの人生経験をさらにゆたかな「真の人間力」へと実らせていかれることを，私も仲間の一人として期待している．

2005 年 2 月「ゆっくり学ぶシニア英会話」のこの年のクラス委員であった T 子さんがくも膜下出血で急逝された．最後の授業で，もう一人クラス委員の Y さんから彼女を偲んで次の Haiku が寄せられた．

Our classmate has passed away
Her call being still here
In the first gale of spring
(仲間逝き　春一番（かぜ）に佇む　電話の声)

ちなみに，Y さんは「シニア英会話」6 年目のベテランである．このクラスからは，私が今までに行ったヨーロッパ旅行に 5 人の方が同行して海外旅行を体験された．2007 年 4 月には，このクラスの初の行事として「英会話海外体験ツアー」が計画されている．もちろん私も同行するが，教師としてではなくシニアの方がたの学習の成果を傍らでとっくりと見せてもらうためである．(2007 年 3 月 3 日，記)